

80 日仏織物交流史（2021年9月23日）

前回、ギメ東洋美術館で展示されている西陣織で作られた源氏物語絵巻をご紹介します（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100234401.pdf>）。今回は、この織物がフランスへ寄贈されることとなった歴史的な背景をお話します。

京都の西陣織は、日本を代表する絹織物で、その歴史は平安時代初期（8世紀頃）に遡ります。時代が変わっても、西陣織の顧客は貴族や武家など常にその時々の権力者でした。西陣織は、18世紀頃に最盛期を迎えましたが、江戸幕府が贅沢を禁じ、二度の大火に襲われました。京都以外にも絹織物の産地が誕生し、明治（1868-1912）時代になって東京に遷都されたことで京都は活気を失い、西陣織は危機に立たされました。

そこで、1872（明治5）年、京都府は絹織物業が盛んなリヨンに職人の井上伊兵衛、佐倉常七、吉田忠七の3名を派遣しました。そこで、3名はジャカード織機の使い方を学び、日本に持ち帰りました。ジャカード織機とは、穴を開けた厚紙（パンチカード）を使った機械式織機で、フランス人発明家のジョゼフ・マリー・ジャカルルによって開発されました。パンチカードを使うことで複雑な模様を早く織ることができます。ジャカード織機はコンピュータの母とも言われています。



京都府は、ジャカード織機を導入した工場（写真右）を開設し、ジャカード織機の生産技術の普及に努めました。しかし、金属製の高価な機械を数多く輸入することは困難でした。そこで、受講生の一人が自分で作ることを思いつき、苦労の末、1877（明治10）年に国産の木製ジャカード織機の生産に成功



しました。ジャカード織機によって生産性が飛躍的に向上し、その後の日本の繊維産業の近代化を進め、西陣織の繁栄を築きました。織物師の山口伊太郎氏は、西陣織がジャカード織機によって再興したことから、感謝を表すために源氏物

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

語絵巻の織物をフランスへ寄贈することにしました。1995年に全四巻のうち第一巻と第二巻、2002年に第三巻が寄贈され、第四巻は山口氏の死後の2008年に寄贈されました。

19世紀にヨーロッパでは蚕の病気が流行したことで、絹の入手が困難となりました。その危機を救ったのが、横浜港から輸出された日本の生糸でした。この絹を通じた交流の歴史から、横浜とリオンは1959年に姉妹都市提携を結びました。リオンは、京都と横浜と深い歴史的なつながりがあるのです。